



# かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

## 自然法爾 (じねんほうに)

自然 (じねん) といふは

「自」はおのずからといふ、  
行者のはからひにあらず。

「然」といふは、しからし  
むといふことばなり。

しからしむといふは、行者  
のはからひにあらず、

如来のちかひ (誓い) にて  
あるがゆゑに法爾 (ほうに)

といふ。「法爾」といふは、  
この如来の御ちかひなるが  
ゆゑに、しからしむを法爾  
といふなり。

\* \* \*

親鸞聖人が弟子にあてて書いた手紙の一節、「自然法爾」です。これは聖人が晩年になって達した境地ですが、それからの生涯においても精力的に多くの書物を著し遺されました。その手紙の末には、「弥陀仏は自然のやうをしらせん料なり」とあり、この道理が分かったならば、自然についてあれこれ考えることはいらない。これは仏智の不思議 (はたらき) なのですからと書かれたのです。

広辞苑を見てみると、「自然」を「じねん」と読むとき、【おのずからそうであること。本来そうであること。ひとりでに。】とあり、あくせく動くのではなく、そのまま流れにまかせる

中で、今与えられているものが最良なのだと思え止める意味にとらえていたことがわかります。

\* \* \*

相次ぐ巨大台風、火山噴火などがもたらす天災、また自らの老いや病気、身近な人の死などに会うたびに、この「自然法爾」という言葉がしみじみと味わえます。

医療が進歩し、あらゆる情報も得やすくなり、国が豊かになったおかげで、私たちは色々な恩恵を受けることができるようになりましたが、そこに「闘病」という言葉、すなわち老いや病と闘う、闘える、という意識を生みだしました。患者自身が病気に打ち勝つんだという強い気持ちを持ってくれないければ、看護や治療の甲斐がないのかもしれない。しかし「闘病」という言葉から広がる医療行為が、患者本人にとって最善であるかには大いに疑問を感じている人が多いのも事実です。

真実は、治ったものは元々治るべくしたものであり、治らないのは治らないものだったのでしょう。そして、いったん治っても、すべての命あるものは死を抱えて生きていて、それは、老いも若きも、健康でも病気でも同じなのです。いのちに勝ち負けはないのです。

かって甥が若くして癌と診断

され、過酷な治療を乗り越えて退院するときの医師の言葉を思い出します。それは「90パーセントは治りました。しかし10パーセントは死もあります」という意味の説明だったそうで、まだ若輩の僧でしたが、親鸞聖人の教えの中で育てられたかげで、他のどんな言葉より疑いなく頷けたと言います。

もちろん健康を維持するための努力はした方がいいでしょう。病を得たら、専門の医療を信頼して治療もするべきです。しかし、禁煙や禁酒、ダイエットのように、何度決意しても3日と続かないでかえって絶望を繰り返し不安を生むことが多いのです。

そんなとき、ありのままに身を委ねていると、ふと光を感じることができ、生かされていることのありがたさに気づかされるものです。老いや病、ときに災いに会うなどの「生の苦しみ」は避けることのできないものですが、それを受け入れることで、智慧と慈愛が生まれ、人生の大切な栄養分となり、どんな人生をも生きぬく力になるでしょう。

今を受け入れ、恵まれてあるお互いのいのちに思いをやる智慧のことば「自然法爾」がしみじみと味わえるときは、今の自分に見合った無理のない生き方ができているときなのです。

合掌

## 奏庵法座

日時  
10月26日(日)  
午前11時

「真宗宗歌」  
正信偈  
法話 住職  
ご文章拝読  
「恩徳讃」  
～\*～  
おとき

”天災は忘れた頃にやってくる…”は、めったに起こらないのではなく、何度も何度も繰り返されてきたからこそ言われてきた言葉だったと実感させられる秋です。

すべてが変わりゆくもの、何一つ思うようにいくものはないことをお釈迦様の時代から聞かされていながら、いつも起こってしまわなければ「そうだった」と頷けない私たちです。だからこそ聞き続けなければならないのでしょう。

どうぞお参り下さい。



## ご案内

## シンポジウム”ご縁”

新たなご縁づくりに向けて

主催 築地本願寺

日時

平成26年11月2日(日)  
午後1時～3時30分まで

会場 横浜・新都市ホール  
(横浜そごう9階)

講師 宮崎哲弥氏(評論家)

パネリスト 女優 音無美紀子

海洋冒険家 白石康次郎

コーディネーター

丘山願海師

浄土真宗本願寺派総合研究所

副所長・東京支所長

先の見えない現代社会で、私たちが心豊かに生きていくために「ご縁」によって生かされることの素晴らしさ、尊さについて一緒に考え、語り合ってみましょう。

入場料は無料ですが、定員は500名で、事前の申し込みが必要です。参加ご希望の方は、今月の奏庵法座お参りの際に申し出ていただくか、お電話にてお申し込み下さい。お寺の方で手続きし参加者には追って詳細をご連絡いたします。

尚、先着順に定員に満ち次第締め切りになることをご了承ください。

「正信偈」を学ぶ、は  
今月お休みです。

日本人3人のノーベル賞受賞は、失墜しそうだった科学の自信を取り戻させ、我々にも誇らしさとともにホッとするニュースだったが、その報道を見ていると、万有引力という超一流の発見をしたニュートンが、随分と性格が悪く、偏屈だったということを何かで読んだことを思い出した。■ノーベル賞の受賞基準で大切なのは、あくまでその内容であって、それを成した人物の人柄や家族はまず関係ないものなのに、その類のトピックに仕上げようとする相変わらずの”井戸端風”な報道だ。それは確かに興味をそそるし、おもしろいが、ノーベル賞を取り上げるにふさわ

しいだろうか。■師弟が揃っての会見で、最初の発明者である赤崎教授が、少しモタモタしながらポケットから初期の「青色発光ダイオード」を取り出して見せ、それがどれだけ発展、進化してきたかを説明されようとする姿は、物静かな口調の中にも自分の辿ってきた道のりを語る機会に嬉々とし、教授自身の人柄と、発展させてくれた弟子への敬意が表われていて微笑ましいものだった。そこに感性がいつかそのメディアであるはずのものが全く見られず、映像は途中で切られた。家族などの映像は繰り返し繰り返し報道されるの

にだ。■専門的なことは確かに我々が聞いても解らないし、おもしろくないのは事実だが、受賞の意義や重みを思うなら、その「正しい理由」がわかるご本人の言葉に耳を傾け敬意を払ってこそ、未来のノーベル賞受賞者を生む種となるのでは…と思う。報道のあり方が問われている今なのに、何でも三流タブロイドにもって行ってしまう愚に気づかないのだろうか。

■ノーベル賞の、物理、医学、経済、文学芸術、そして平和は、すべての人、生き物が「豊かに生きる」ために研鑽されるものだ。それを志し偉業を成す人とは、変わり者であっても、世間擦れした空気が読めなくてもいい。ただ、「誠実に暮らす中で励む」ことがなければ生まれることはないことだけは確かだ。 Norimaru